

令和2年度第2回地方独立行政法人京都市立病院機構理事会 議事録（要旨）

- 日 時： 令和2年5月26日（火） 午前10時30分から12時00分まで
- 場 所： 市立病院北館7階ホール1
- 出席者： 理事長 黒田 啓史
理 事 森 一樹，清水 恒広，半場 江利子，松本 重雄，能見 伸八郎，
山本 みどり，白須 正
監 事 長谷川 佐喜男，中島 俊則
事務局 折戸経営企画局次長，長谷川担当部長，大島京北病院統括事務長，
濱口経営企画課長

1 開会

2 議事・報告等

(1) 令和元年度 京都市立病院機構決算（速報値）について

資料1に基づき、折戸経営企画局次長から説明

- 新型コロナウイルスの病院経営への影響はどうか。
→ 新型コロナの影響が見られ始めたのは2月に入ってからである。入院・外来患者数は減っているが、報酬単価を上げる地道な努力が重要であり、経営改善に取り組んでいく。
- 以前から材料費が支出の大きな割合を占めている。恒常的な課題としてどうとらえているか。
→ 診療科の協力も得ながら、共同購入などのコストを抑える取組を進めていく。
- 一般病床の稼働率が1.9ポイント低下している。これを上げることで収益改善につながるということか。
→ そのとおりであり、一番影響が大きいのが病床稼働率であり、紹介元診療所との連携を充実していかないといけない。

(2) 令和元年度 年度計画の実績報告について

資料2に基づき、折戸経営企画局次長から説明

- 緩和ケア病棟を開設したが、今後の見通しはどうか。
→ 本格的な稼働から、まだ間もない段階であるが、終末期の患者さんは入れ替わりが早いこともあり満床には至っていない。現在は院内他科からの転床が大半であるが、他病院からの受入れに努めていく。
→ 緩和ケアは病気になった時点から始まるもので、終末期の方だけが対象ではない。緩和ケアを受けて退院していただくなどの使い方も院外にアピールしていきたい。
- ロボット支援手術の件数は増えるのか。
→ 元年度は153件の手術に取り組んだが、新型のダヴィンチでは、例えば直腸など使える症例が増える。
→ 新型コロナの影響もあるが、年間200件程度を目指したい。

(3) 収入状況月次報告（令和2年度4月分）

資料3に基づき、折戸経営企画局次長から説明

- 新型コロナの影響で手術を先送りしたために、待機している人は多いのか。また、この影響で軽症の外来患者が減っていくのではないかと。
- 不急の手術を延期しているのは事実だが、希望される方には手術を行っている。延期された方については、収束後に本院で手術を受けていただけるよう取り組んでいく。また、新型コロナの影響で、外来患者の層が変わっていく可能性はある。病院にとっては様々な影響があるが、一つの機会として受け入れていく。
- 新型コロナの影響で、一般企業では在宅勤務などに取り組んでいるが、病院はどうか。
- 在宅勤務は導入していない。新型コロナ対策に他部門からも動員しているほか、治療が必要な方は通常どおり受け入れており、病院としての業務量は減っていない。

3 閉会